
妖幻抄 4章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 4章

【ZPDF】

Z0861A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

勝手にいなくなつた罰として、首輪を付けられた明。けど、なんとか抜け出そうとして…?

ヤキモチ（前書き）

初めましての方も、そうでない方も、こんにちわ。維月です。
どたばたコンビ（？）の二人。

今回はちょっとぴり、ギャグ入りかも（笑）
楽しんで、読んでいただけると幸いです。
これからも、どうぞよろしく。

勝手にいなくなつた罰として、後日、明は仕置きを受けた。

「」一ら、じつとしてる…騒いだら、余計に苦しいぞ？」

「やだつ、首輪なんか付けてつ、外してつ、外してよーつ…」

「ダメだ、お前、すぐいなくなるし」

「いや
つ！？」

「ん？」

氷雨は、戸口に寄りかかっていた友人に気づき、かけ寄つた。

「どした？疾風^{はやて}、うるさいだろ？、コイツ」

氷雨が、疾風、とよんだ少年は、以前、崖の上から、明たちを見張つていた少年だった。

「よつ、明…なーんだ、首輪つけられてんのか。かわいそ^うじやねえか、外してやれよ」

「い
や、ダメだ。コイツときたら、すぐいなくなるつとする」

「それが普通だらうがよ、なー？かわいそーに」疾風は、明の首輪をゆるめてやる。

ぐしゃぐしゃ、と髪を撫でられ、暴れる明。

「氷雨、意地悪い…だから、こうこと、きかない」

「つたぐ、お前…サドだぜ？こんな可愛いヤツにじめてつて、およ？」

明が、いない。あるのは、外れた首輪だけ。

「逃げた
つー？」

「まあ、戻つてくるや。懷いてンだろ？ぶほつー！」

氷雨、疾風を殴る。

「あいつ捕まえるのに、じんだけ苦労したと思つてやがるー搜すぞ

つ

「つてえなあ…わーつたよー！」

「もたつくな、あいつ…すばしーいんだからつ」

「つてて、殴なんくたつていいだろうに、明 つ、どいだよー！て、いるじやねえか。なあ、氷雨…見ろよ、あれ、人間の雄だぜ？」と、疾風。

明は、村はずれの、茂みにいた。

「ホントだ、つてちがう！明、明…戻つてこい」

明は、つんつと顔をそむけ、人間の雄を連れて、森の中へと、入つていつてしまつた。

「あつ、あんにやろう…」

「おーおー、嫌われてんなあ…それより、早く捕まえなきや、やばいんじやねえか？」

ニヤニヤと笑いながら、疾風は、氷雨の脇を小突く。

「分かつてるつ、お前はそこにしてる…」

「ほーうい」

一方、明と同族の雄は、明に氣があるようだつた。しきりに、木の実や、小石、鳥の羽なんかを差し出している。心なしか、明が嬉しそうに見え、氷雨は、胸につかえをおぼえた。（あいつ、あんな顔して笑つたつけ？なんで、俺にじや…ないんだろう）

我慢できなくなり、氷雨は、藪から飛び出した。

「明つ…こつち、こいつ。帰るぞ！」

氷雨が踏みだすと、人間の雄は、身じろいで一步下がつた。

明は、慌てて、雄に言い含めるよつこすると、一言、逃げてと言つた。

人間の雄が行つてしまつと、明は、ゆつくつと氷雨の傍に歩み寄つた。

「行くぞ明、早くこい」

そう言う、氷雨の声は冷たい。

明は、少し寂しそうに、後ろを振りかえる。しかし、すぐに氷雨の後に、ついていった。

本心（前書き）

互いを必要としているのに、やつと気づいた二人。
二人が、葛藤の果てに、見いだすものは…！？

「勝手にいなくなつて…つたく

小言を言つ氷雨に、明は押し黙つてしまつた。
(しかも、コイシのあんな顔…見たことねえ)

「「めん、氷雨…怒らないでくれ」

「べつ、別に怒つちやないぜ、なに言つてる」

氷雨は、慌ててそっぽを向いた。

「でも、怒つた力オ…」

「んな」た、どうだつていい。メシでも食つてねよ

氷雨は、乱暴に皿を近づける。

「氷雨…」

「どうした、食わないのか?」

皿を押しのけ、明は、氷雨の背中に抱きついた。

「な…あ、明? おいおい…」

「怒るな、「「めん…久し振りに、人間を見て嬉しかつたんだ。怒ら

せるつもりなんて、なかつた」

「なつ、泣くな つー明、泣くんじやねえつ」

泣き出した彼女に、慌てまくる氷雨。

「あ らら、ダメじゃねえか…泣かして。なんなら、じつちくるか? 明」

「疾風、女好き…だから、イヤ」

「つとと、お前が言つと刺さるなあ…ま、ケンカするまじ仲はいいつて言つしな。お前らがテキてんのせ、黙つててやるわ」

「でつー? なんでそつなるつー違つだろ、そこの。コイシは、ただのペットだよ」

「だあつてよおー…女ども、今のその話で持ちきりだぜ? 寝床も、一緒なんだろ?」

「そつ、それはだなつ…」

しどりもどりの氷雨。

「明～…お前、氷雨が好きか？」

「好き。優しくしてくれる、氷雨は好きだ」

「お～おい氷雨え、なにやらしこトしてンだよ?え? そういや、明…お前いくつだよ、分かるか?」

うつとりと話す明を、疾風はからかった。

「じゅう…一、だ

「いい頃だなあ、氷雨…いじつ…」

「お前の方が、よつぽどやらじこ～。」マイシとは、なんでもないつて言つてるだろうが!」

「それはそうと、いないぜ? 明

「え…明! ?

明は、走つた。

力一杯走つて、早く、ここから離れてしまひたかつた。

「氷雨は、あたしが嫌いになつたんだ…だから、あんな事言つたんだつ!」

(どうせ、妖と人間は…一緒にいられないつ、それが言ひたかつたんだろ? 氷雨)

「なんで、こんなに苦しい! あたしは、一人でも生きていけるのに

つ

明は、蹲うずくまつた。

涙が、後からあとから流れ、止まらない。

(氷雨…好きなのに、なのに、どうしてつ…)

「なあ、氷雨…もつちつとな、素直になれよ。好きなんだろ? 明が疾風は、欠伸をしながら言つ。

「だけどよオ…」

「なに悩んでンのかは知らねえが、素直になればいい、それだけだ」
「分かつてる、でも…上手く言えねえんだよ。言おつとしたことの、反対を言つてそりで」

「あ、つもう…つだうだ悩んでねえで、そつと行つてこ

い！明を見つけたら、もう絶対離すンじゃねえ！いいなつ
疾風は、氷雨を引っ張り上げると、背中を突き飛ばした。

「あ、ああ！」

「早く行けっ！」

頷いて、氷雨は走り出した。

（始めから、分かつてたばずだ：会つたら、言つてやる！明…）

明は、崖の上にいた。

谷底を流れる川に、小石を落とす。

「ここからなら、楽に死ねそうだ」

踏み出そうとした、彼女の腕を、何者かが掴んだ。

「なつ！お前…さつきの」

明の腕を掴んだのは、さつき、彼女が逃がした雄だった。

「死ぬ、ダメ…生きる」

「お前、話せるのか！？」

人間の雄は、嬉しそうに何度も頷く。

「レキ、いう、名前、レキ」

「あたしは…明。レキは、一人なのか？」

「いない、だから、家族、作る」

「連れを捜しているのか、見つかるといいな

「もう、見つけた…明」

「え！？」

「明、今…一人」

一人、という言葉に、明は、顔をそむけた。

「一人じゃ、ない…あたしは」

（今、村を出てきたじゃないか…一人、だ）

「明、泣いてる…」

レキはおろおろする。

「どう、どうしてダメなんだ！好きなのにつーこんなに、愛してるのでに つ！？」

「明…！」

走り去つた明を、レキは追わなかつた。

（気配が、近い、待つてる…明、今行くつ）

氷雨は、木々の間を走り抜け、やがて、すぐに明を見つけた。明は、白い花の群れの中に、横たわっていた。しきりに、しゃくり上げる音がする、泣いていたのだ。

「明…明、俺だ」

氷雨は、そつと明の肩を揺らした。

「氷雨え…あたし、傍にいたら、ダメなの？好き…なの？」

「泣くな…」

氷雨は、明を抱き上げて、言つた。

「今まで、すまなかつた。俺は、逃げてばっかりだ」

しゃくり上げたまま、明は、黙つている。

「許されるなら、好きと言いたい。明…」

「氷雨、一人はいやだ、傍に、いてくれ」

明は、氷雨の胸に、頬ずりして甘えた。

幼い子供のように、必死にしがみついている。

「明…いい子だから、泣くな」

涙を拭い、明は頷いた。

「うん。そばに、傍にいても、いい？氷雨、好き」

涙声で、語尾が掠れている。

「明！」

氷雨は、明を抱きすくめていた。

「く、苦しい…氷雨っ」

「お前を、一人にしない！だから…お前も、もつ勝手にいなくなるなつ」

「氷雨…」

「愛してる、どうしようもないくらい…だから、ずっと、一緒だ」

搾りだすよつに言つて、氷雨は俯いた。

その顔は、これでもか、といつぱり赤くなっていた。

「嬉しい、氷雨。もう、ずっと一緒にいなくなったりしない」

明は、そっと氷雨の頬に触り、静かに唇を重ね合わせた。

それとほぼ同時に、氷雨は、いとおしむように明に口づけ、舌を絡めた。

「ひつ、氷雨つ！」

明は、氷雨の胸を押し返して、座りこんだ。

「あ、すまん…急に、嫌だよな？ンなこと

ふるふる、と首をふる明。

「恥ずかし、かつたの…」

今にも、消え入りそうな声で、明は言つ。

「帰るうか」

「え？」

「家に、帰るう？」

「うん！」

差しだされた、氷雨の手を握つて、明は笑いかける。

氷雨も、柔らかな笑みを返した。

幸せに浸る二人を、次なる、新たな事件が襲おうとしていた。

いまは、まだ…なにも、知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0861a/>

妖幻抄 4章

2010年10月28日04時10分発行